

科学技術政策担当大臣等と総合科学技術会議有識者議員との会合 議事概要

- 日 時 平成25年1月17日（木）11：02～12：12
- 場 所 合同庁舎4号館第3特別会議室
- 出席者 山本大臣、伊達副大臣、島尻政務官、青木議員、中鉢議員、平野議員、大西議員
倉持統括官、大石審議官、中野審議官、吉川審議官

○ 議事概要

○大西議員 本日は、私が進行役を仰せつかりましたので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。
また、今日は新しく就任されました山本大臣、山本大臣については年末に御出席頂きましたが、伊達副大臣、島尻政務官に御出席頂き、どうも有難うございます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。議題に入る前に、先ず山本大臣から御挨拶を頂戴したいと思いますので、宜しくお願い致します。

○山本大臣 本日は大変お忙しいところ、総合科学技術会議議員の皆様にはお集まり頂きまして、有難うございます。総合科学技術会議については、実は4人の方々任期を終了しておられまして、実は、この方々の国会同意人事で新しい議員の方を決めさせて頂かないと、本会議もなかなか開けないという状況で、大変御迷惑をおかけしている事をお詫び申し上げたいと思っておりますが、官邸等々とも相談して、人選を急いで進めておりますので、担当大臣として1日も早くこの国会同意人事についても国会で認めて頂けるように努力させて頂こうというふうに思っております。

細かいお話は致しませんが、科学技術総合会議、まさにベスト・アンド・ブライテストの皆様が集まって頂いて、総理と内閣に対して科学技術全般についての様々な提案、立案、総合調整をして頂いているというふうに認識しております。更にこの総合科学技術会議の機能を高めるために、恐らく本会議の方でも、色々議論されたと思いますが、設置法の改正案を前政権の時に出す予定だったのですけれども、解散総選挙で廃案になってしまったという事もございます。

総合科学技術会議の機能について、議員の皆様には色々お知恵を頂こうと思っておりますけれども、やはり法的にももう少しきちんとした権限を付与して頂けるように、この内閣設置法の法案もとにしながら、私のもとで、出来れば新たな法案、科学技術総合会議の機能・権限をきちんと高める、実質的な企画立案能力というものをしっかりと付与して貰うような法的な枠組みについて、事務方のほうにも検討を指示致しました。これは担当大臣としての気持ちですが、この国会に出せるかどうかは他の色々な法案とのバランス等々、政治状況もありますけれども、しっかり法案として出して出来るだけ早く成立させるように努力したいというふうに思っていることだけ申し上げて、簡単ですが、御挨拶に代えたいと思っております。有難うございました。

○大西議員 大変力強く方向を指示して頂き、有難うございました。続きまして、伊達忠一副大臣から御挨拶を頂戴したいと思います。

○伊達副大臣 本日は、お忙しいところをお集まり頂きまして、有難うございます。内閣府副大臣を拝命致しました伊達忠一でございます。宜しくお願い致します。

先程平野先生とお話をしましたが、同意人事につきましては、色々時間的なことがございまして、御迷惑をおかけしましたことを私からもお詫び申し上げたいと存じます。

我が国にとって、この科学技術イノベーションは、将来に向けた競争力の源泉であり、今後、社会・経済をさらに発展するためには、国主導で科学技術のイノベーションをリードすることが私は喫緊の課題だろうと思っております。

科学技術イノベーションの実現のためには、研究開発における成果、その成果を社会的課題の解決に結びつけること、この両方が必要だと思っております。私としても総合科学技術会議の司令塔機能化を進める、そういう政府全体的な科学技術のイノベーションを強力に推進してまいりたいと思っておりますので、今後とも、皆様の御協力、御支援を宜しくお願いしたいと思います。

○大西議員 どうも有難うございました。それでは、続いて、島尻安伊子政務官から御挨拶を頂戴致します。

○島尻政務官 御紹介頂きました島尻安伊子でございます。この度内閣府大臣政務官を拝命致しました。山本大臣、そして伊達副大臣、しっかりとお支えをして頑張っていこうというふうに思っております。

今、伊達副大臣からもありましたように、イノベーションの創出というのは成長力の源泉であり、これを強力に進めていくとともに、科学技術イノベーションの成果を、その利活用に至るまで一体的に進めていくということが重要だというふうに考えております。

また、東日本大震災のような未曾有の危機を受けた我が国が復旧・復興・再生をしていくという上でも、科学技術イノベーションの役割は極めて重要だろうというふうに考えております。

私と致しましても、有識者の議員の皆様方とともに、持続可能で活力ある社会を再構築していくための具体的な政策を推進してまいりたいと思っておりますので、宜しくお願い致します。

○大西議員 どうも有難うございました。

議題 1. 日本経済再生本部等の動向について

議題 2. 科学技術イノベーション政策推進懇談会等の設置について

○大西議員 それでは、議題に入りたいと思います。最初に、議題 1 の「日本経済再生本部の動向について」、倉持統括官から趣旨をお話し頂きたいと思います。

○事務局（倉持統括官） 日本経済再生本部等の動向ということですが、総合科学技術会議を巡る昨今の状況について、御説明申し上げたいと思います。昨年12月26日に第2次安倍内閣が発足致しまして、その当日の閣議決定によりまして日本経済再生本部というものが設置されております。その第1回目の会合が1月8日に開かれております。これは、山本大臣も御出席されておりますけれども、そこで、同本部のもとに、我が国の産業競争力強化や国際展開に向けた成長戦略の具現化と推進について調査審議するために、産業競争力会議を開催するということが決定されております。

この決定を受けて、日本経済再生本部あるいは産業競争力会議における成長戦略策定に向けた議論におきまして、イノベーションが競争力の源泉であるというふうな位置付けが与えられておきまして、総合科学技術会議とこれらの会議との積極的な連携を図っていくこととされているところでございます。詳細につきましては、この後、担当参事官から御説明申し上げます。

そして、次に、先程大臣が御発言されました、1月5日付で退任されました総合科学技術会議の有識者議員の後任人事につきましては、今鋭意国会同意を得るべく、大臣が先頭に立って諸調整に当たっておられるところでございます。

ただ、現在まだその同意が得られていない状況にございますので、法的に総合科学技術会議の本会議だけでなく、総合科学技術会議の下に置かれている科学技術イノベーション政策専門調査会やその下に置かれている各戦略協議会についても開催出来ない状況になっております。

このような状況下ですが、実は昨年も同様の状況がございましたけれども、これまで各戦略協議会等で行ってきた議論、これは極めて重要な課題について御議論頂いてきておきまして、これを実質的に継続していくために、各戦略協議会等をそれぞれ懇談会という形で開催させて頂くこととしております。

懇談会におきましては、所謂総合科学技術会議としての意思決定ということとは出来ませんが、実質的な御議論は、これまでと同じように行うことが可能でございますので、そういう状況を御理解の上、何卒宜しくお願ひしたいというふうに考えているところでございます。

○大西議員 それでは、今の総括的な話に関連して、議題 1 の「日本経済再生本部等の動向について」、それから議題 2 の「科学技術イノベーション政策推進懇談会等の設置について」、担当参事官から説明をして頂きます。

<議題 1 について、内閣府 杉谷参事官から説明>

<議題 2 について、内閣府 中川参事官から説明>

○大西議員 それでは、議題1、議題2は、報告ということですが、御意見がありましたら、お願い致します。また、大臣のほうから総合科学技術会議と他会議との連携等について、何か御発言がありましたら、お願い致します。

○山本大臣 もう皆様、御存知だと思いますが、安倍総理は総合科学技術会議に対する思いがすごく強くて、最初に科学技術担当大臣を任命された時にも、総合科学技術会議がすごく大事なので再活性化してほしいというお話がありました。特に、総合科学技術会議と産業競争力会議の連携については、経済再生本部の会合でも言及されています。

日本の基礎研究のレベルは世界最高ですが、それが産業化、経済活性化になかなか結びついていかない部分があって、その成果を国民がなかなか享受出来ない部分があるのではないかと、この問題意識をお持ちです。そこについて、もう少ししっかり力を入れてほしいということで、これは当然安倍内閣の最大の使命である「日本を取り戻す」、「強い経済を取り戻す」というところに結びつくと思います。今甘利大臣とも色々調整させて頂いておりますが、総合科学技術会議と日本経済再生本部、実働部隊で一番大事なところである産業競争力会議との連携、これはしっかりと形を作らせて頂こうというふうに考えております。

○大西議員 この議題については、宜しいでしょうか。これから産業競争力会議も動き出すということになります。総合科学技術会議は、これまでの経験で行政組織を科学技術の振興という点で動かしていくという仕組みを随分構築してきたと思いますので、今後も新しいアイデアを入れながら、さらに発展させていくという役割は最低限あると思います。

更に総合科学技術会議の中からイノベーションに相応しい、色々な新しい施策が打ち出されていくということも大事だと思いますので、新たな気持ちで総合科学技術会議としても議論を深めて、いい施策に結びつけていきたいと思っております。どうぞ、宜しく御指導お願い致します。

議題3. 平成24年度補正予算（科学技術関係予算）について

○大西議員 それでは議題3に移ります。平成24年度補正予算（科学技術関係予算）についてであります。説明をお願いします。

<内閣府 鈴木参事官から説明>

<内閣府 中川参事官から補足説明>

○大西議員 これは通常国会に提案されて審議されるということになると思いますが、何か御質問がありましたら。

○中鉢議員 これは、まだ予算案の段階なのでしょうが、このままで通過すると、単年度の予算額としては、レコードハイというか、今までで一番高額になるということでしょうか。8ページの図で見ると、24年度の5兆1,268億円が一番高い数字になっていますよね。

○事務局（鈴木参事官） おっしゃるとおりです。

○中鉢議員 有難うございました。

○事務局（鈴木参事官） 1点、1ページの表と8ページの棒グラフの関係について、今の質問に関連して整理のために申し上げますと、1ページ目の資料の「全体額」という上の表がございます。24年度の当初予算と補正予算額ということで、これはトータルで4兆6,864億円という数字がございます。これが先程の棒グラフでこの額がどこに当たるかというのを御紹介申し上げますと、8ページの24年度の棒グラフのところで、一番上の地方公共団体分4,404億円分を除いたブルーの頭のところまでの数字が今申し上げました4兆6,864億円ということになります。これに地方公共団体部分をプラスしますと、5兆1,268億円となります。

○山本大臣 私、総合科学技術会議を担当して、まだ1カ月経っていないのですが、一番大事な

ことは、総合科学技術会議の議論がこの予算に反映されたかどうかということだと思います。このことについて、十二分に、つまり反映されたというふうに先ず評価をされているのかどうかをお聞きしたい。

それからもう一つは、倉持統括官にもお願いしたのですが、例えば、山中先生のiPS細胞への10年間、1,100億円の支援、これについても、私の立場としては、総合科学技術会議が果たしてきた役割というものを内外にしっかりアピールをしていきたいというふうに思っています。iPS細胞への1,100億円は文科省の予算ですが、総合科学技術会議の議論がこれにどういう形で反映されたのかということ、常に国民に分かり易く説明出来るような資料を是非作って頂きたいというふうに思っています。

iPS細胞へ1,100億円を文科省はきちんとつけました。当然総理も、これを後押ししました。財務大臣もこれは大事だと言いました。それでは総合科学技術会議はどういう貢献を果たしたのかということについて、これまでの議論の経緯を説明では聞きましたけれども、臨場感がないのです。総合科学技術会議の有識者議員の皆様の議論が、このiPS細胞の後押しにつながっているというところをきちんと分かり易く、それを常に説明出来るという観点で、是非資料も作って頂ければというふうに思います。

この補正予算案、先程議員の皆様の御発言がありましたが、これは今までの総合科学技術会議の議論を十分に反映された予算になっているとお考えなのか、議員の皆様の率直な御意見を伺いたいと思います。

○中鉢議員 新たに安倍総理から「成長による富の創出」などの方針が出され、これまでと少し区分が変わってまいりました。第4期の整理では、イノベーションによって解決を図るものとして、「復興・再生」「グリーン」「ライフ」が最重点項目にされていますので。しかし、今のご説明によると、その区分にはなっておりません。

事務局からのご説明では、例えば復興については、「成長による富の創出」ではなく、「復興・防災対策」という区分での説明になっていました。「成長による富の創出」に対して、補正予算の中でどのように充当されているかどうかということについては、詳細に見てみないと分からないと思いますが、3つの分野については既に来年度予算の策定において、各省に対して政策誘導を行い、予算案に反映されているとっております。

補正については、見方、切り口が変わりましたので今の段階ではまだはっきりしたことは分からないと思います。切り口を変えて整理し直してはどうかと思います。

○大西議員 今の議論、今年度は特殊で来年度当初予算がまだ決まっていない訳です。総合科学技術会議としては、来年度当初予算に盛り込むべくアクションプラン等の議論を重ねてきて、来年度当初予算でどの程度ここでの議論が反映されるかが先ず第一で、仮に、そこでほとんどが採択されれば、回答としては、かなり成果があったということになると思います。その上で今年度補正予算になるので、来年度当初予算に成果があればあるほど、今年度補正予算に回る弾はなくなっていくということになる訳です。

今回は、来年度当初予算のことがまだはっきりしていないので、今年度補正予算がどうなのかというのは、整理するのが難しい面もあると思います。逆に、今年度補正予算に沢山回らないといけないという事態は、来年度当初予算で余り成果がなかったから積み残しがたくさん出てきたということも言えるので、その整理を来年度当初予算と今年度補正予算両方についてやってみないといけないのかなという気がします。

いずれにしても、今年度は今年度として、今年度当初予算についてもまだ残っていると思いますけれども、政策の全体の枠組みの中で科学技術関係の予算の議論をしていくというその辺の整理を来年度に向けてやっていく必要があるのかなという気がしています。そういう意味で、今の段階で整理がなかなか難しいと思います。

○中鉢議員 少なくとも、今言ったレコードハイであるということ、このままであればという前提ですが、大変評価出来ると思います。諸外国に比べて、日本の大きな特徴は、民間による研究開発が非常に大きな比率を占めているということであり、大きく産学連携を進める上で、公的研究機関の予算拡充というのは評価出来ると思います。

○平野議員 私も細かいところまでは来年度当初予算との関係を見ないとよく分からないのです

が、大ざっぱに言いますと、ここで議論してきた「科学技術が国の発展のために非常に大事であり、そのために基礎も支えていかなければならない。」という大枠の中で、今年度補正予算に、今回「科学技術を重点的にやるのだ」ということが、数字の上で表れているかという観点から見ますと、私は総合科学技術会議での議論は反映されているのではないかと思います。

○青木議員 確かに各議員がおっしゃられたように、これまで重要であると思われる項目が入っていると思います。あともう一つ、当初大臣が、これからは連携が大切とおっしゃったように、一段と連携が強まることを期待します。今年度補正予算でも、例えば、IPS関係の予算が文科省にもあるし、経産省にもあるというように連携の方向にあるというようなことは言えるのではないかと思います。今後、それが一層発展するのを期待しています。

○山本大臣 有難うございます。

○大西議員 これは来年度当初予算に要求しているものを前倒しで今年度補正予算に回しているのもあるということですね。

○事務局（中川参事官） 事実関係としては、大西議員がおっしゃった通りです。先ず1つ目の中鉢議員の御質問については、先程鈴木参事官から今年度補正予算の資料の表の中で柱立てが3本、「暮らしの安心・地域活性化」という柱、「復興・防災対策」という柱、「成長による富の創出」に振り分けられております。主には、先程御紹介した「成長による富の創出」という柱で、そのリンケージは、もう少し精査をしないと、どういうふうに割り振っているか。これは、今後の御議論にも関係するところはあるかと思います。

それから、御案内の通り、15カ月予算という切れ目のない予算ということでございまして、来年度予算についても今月末には原案がまとまる予定です。これとパッケージで議論がされてきている、その前倒し分という、或いは極めて重点なものと、加速するものという位置づけでございまして、恐らく全体として御議論頂くのがいいのかなという気が致します。

○平野議員 個別になりますけれども、基礎が非常に大事です。但し、如何に産業に結びついていくかということが課題であります。この今年度補正予算の資料の中で、特に注目すべきと思うのは、3ページの「大学及び研究開発法人に1,800億円出資する」という部分です。これが今までの日本の国の発想の中で非常に画期的だと思います。私の理解の範囲では、大学に産官が出資をして、大学に子会社みたいなものをつくって、研究開発、大学の知とか、知財、それをいかに製品開発のほうに結びつけていくか。1つの橋渡しという、非常に実験的な試みだと思います。私もこういう発想が出てきたのは驚いたのですが、規制等をうまく取り払えば、大学の持つ潜在能力を引き出して、うまくいく可能性は秘めていると思います。まだ中身が色々決まっていないようなので、今の段階で評価は難しいですけれども、なかなか新しい試みだと思います。

○山本大臣 平野議員のおっしゃった出資のお話、これは、公開・非公開のどちらで議論することなのかどうか分かりませんが、後で話を伺いたいと思います。今議員の皆様のお話を伺っていて、大きな方向性としては、これまで総合科学技術会議が議論していたことが反映されていると思いました。

なお、中鉢議員のお言葉を借りれば、レコードハイに一応科学技術の予算がなったということについても、これは評価しているというお話がありました。青木議員のほうからも、各省庁の予算の連携についても萌芽が見られるというか、いい方向になっているというお話がありました。私の問題意識では、それでは、例えば、ここで科学技術関係の予算案を議論する時に、大きな方向性としては総合科学技術会議での議論は反映されたが、ここはどうも十分じゃないということがあった時に、総合科学技術会議の役割とすれば、どこまで出来るのかということだと思います。

要は、先程言いました法改正の感覚、つまり、各省庁に対して総合科学技術会議が議論したことをどこまで促すのか。例えば、各省庁は、多分それを尊重するということになっているのですが、それをもう少し進められないのか。これは、正直言って各省庁との調整というのは、本当に簡単ではないと思います。これまでは色々知恵をうまく出すことによって、予算の権限

を持ってくるというよりも、中に入って、中からいい政策を出して促していくみたいな話だったのですが、それで本当に十分なのだろうかというのが私の問題意識です。例えば、各省が総合科学技術会議の色々な提言、意見を尊重するというところに、もう少し強い権限と言いますか、もう少し、総合科学技術会議が計画立案したものが反映されるという部分を強められないかというものです。法改正するのもものすごく大変だと思います。例えば、総合調整は内閣府がしなければならないのですが、何か会議を設置し、総理の意向を反映させるなど、何らかの仕組みを導入することを考えることによって、恐らくここの議論ももっと具体的になっていくのではないかと思います。

各議員がおっしゃった通り、恐らく本予算を見ないと分からない部分もあると思います。前倒しになったところもあるし、ここで話し合ったテーマが本当にどこまで盛り込まれているかというのは、それを見なければ分からないと思います。ここまで総合科学技術会議に素晴らしい人材を集めて、ここまできちんと議論して頂いて、日々、統括官を初めとする事務方の皆様が努力して、仕組みは日々進化していると思います。しかし、私の問題意識としては、これを科学技術イノベーションとして出口に持っていくためには、もう1歩進んだ機能、権限をきちんと総合科学技術会議に付与して貰ったほうが、ここでの議論も、より具体的になるのではないかと思います。

ここで議論したことを反映させるために、よりもう少し強い仕組みをつくることによって、内閣府の目指す、各省庁よりも一段高い位置に立って、基本政策、或いは科学技術政策全般について総合調整をする司令塔の機能を果たすということに資するのではないかというのが、私の問題意識であることを申し上げておきたいと思います。

- 大西議員 今の大臣の御発言を受けとめれば、2つのやり方。1つは、各省庁の施策に方向づけをするための議論をして、各省庁に総合科学技術会議の示している政策の方向に合致するような施策をつくってもらいやり方と、もう一つ、典型的にはFIRSTみたいに、これは麻生政権のときに発案されて、前政権の中で少し縮小されましたけれども、実現されたもので、山中先生のプロジェクトとか、この間御覧になられた山海先生の筑波とか、色々なプロジェクトがあって、イノベーションという意味でかなり成果を上げてきていると思います。そういうものは、まさにトップダウン的にプロジェクトを採択して、相当な資金をつぎ込んで加速しているもので、まさに総合科学技術会議がトップダウン的に実践しているとも言えると思います。だから、そういうタイプのもので、ある意味で2つ必要なのかなと思います。トップダウン的なものだけでどこまでやれるかということもありますから、網かけも必要だということもあると思います。その辺りの整理もしていく必要があるのかなというふうに思います。

- 山本大臣 今大西議員のおっしゃったことは、ものすごく大事なことで、おっしゃった通り、2つのアプローチがあると思います。FIRSTみたいなプログラムで行う、予算をもって、よりダイレクトに各省庁を促していくというやり方と、大西議員がおっしゃったように、まさに中に入り込んで、知恵を出して促していくという2つのやり方があると思います。私の問題意識としては、それは両方強める必要があるのではないかと思います。

例えば、ある程度の予算、これは財務省との調整が必要なもので、そんなに簡単ではなく、また実施主体になるというのは、人的な面とか色々なこと考えるとものすごく大変だと思いますが、そこを色々工夫して、総合科学技術会議の裁量で使える予算を強化していくということと、それからまさに先生がおっしゃった、我々が総合科学技術会議で出したものをきちんと政策として、色々なチャンネルを通じて反映させていくという仕組みについて、反映してもらう根拠をもっと強めようということの2つのアプローチです。むしろ後者のほうが大事なのかもかもしれませんが、両方とも機能的に強めていきたいというのが私の感覚です。倉持統括官初め事務方の皆様が、今までもものすごく努力されて総合科学技術会議を生かすように頑張ってもらったと思います。各議員がおっしゃったように、恐らく当初出来たときよりも、より各省庁に意向は反映されているようになってきていると思います。しかし私はまだ十分ではないというか、これだけの知を集めた場所ですから、もっと政策に反映させていく仕組みが必要だし、ちょうど安倍総理になってからは、出口に結びつけていくのが重要と思っています。とにかく最も重要な機能の一つである日本再生本部という組織と、その実働部隊の産業競争力会議と総合科学技術会議を連携して、省庁横断の体制を作ってくれと日本のリーダーが言っている訳なので、こういう流れの中で言えば、総合科学技術会議の機能をここで一段上げるという環境にあるし、難しい

ことですが、大臣として突破口を開けるように努力していくべきではないかというふうに思っております。各議員のおっしゃった問題意識は、私も共有しています。

○大西議員 政治の力と科学の見識と行政事務力、この3つが合わさらないと、今のことは達成出来ないと思います。ぜひ頑張っていきたいと思います。宜しくお願いします。

議題4. 平成25年度科学技術関係予算の編成に向けて（案）

（率直な意見交換の場とするため非公開）